

「在京浅川会 総会」開催

中止のお知らせ

在京浅川会会長 関根一男

拝啓 朝夕はしだいに涼しさを感じるところとなりましたが、皆様方におかれましてはお元氣にお過ごしのことと拝察いたします。

さて、本年は新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、東京オリンピックの延期を始めとしてあらゆる大会や催事が中止となるなどの事態に見舞われております。

ご承知のとおり、本会は毎年十一月に開催しておりますが、新型コロナウイルス感染拡大の収束が見えない状況を受けて、今年は中止する運びとなりましたのでお知らせいたします。

本会を楽しみにされていた会員の皆様には大変申し訳ございませんが、皆様の安全を最優先に検討しました結果で

すので、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

尚、本年度総会の決算資料等は、十二月の、広報「あさかわ」郵送便に同封させて頂きたいと思っております。又、来年の開催につきましても、時期が参りましたら、改めて検討させて頂きます。末筆になりましたが、皆様の益々のご健勝を心よりお祈り申し上げます。敬具



あさかわ寅吉会 No.6

貫秀寺にある鈴木家の墓石石柵

相田道代

町の文化財保護指定の小貫の貫秀寺に、小松寅吉作の墓石石柵があります。小貫字宿の内、鈴木恵家（十七代目）の先祖の鈴木巳之治（十三代）によって、明治三十年に建立されました。

薬師堂を左へ進んだ右奥に、一際目立つ龍の門があり、正面奥に、丸に釘抜きの家紋が見える墓石です。

頭上より彫りの深い待ち構えた龍が

睨みを利かせ、透かし彫りの虎と狛犬らしき獅子が両脇にて墓守していると思わせる姿勢に、名は刻まれていないものの寅吉の作品であると直感できます。でも虎の彫刻が施されているのは何故か？

墓石石柵は十七枚からなるパネルを繋いだように造られており、悠々とした花鳥や動物全てが寅吉の得意とする両面透かし二重彫りであることに驚嘆します。さらに夢みる鳳凰が楽園へと導いてくれそうな柔和な彫刻に、先祖の成仏の心の奥を覗いた作品でもあります。

当時鈴木家は小野田村で最も資産家であり、教育界や地方行政に多大なる貢献をされた家柄でした。石工として熟練した五十三歳の寅吉が、鈴木家に応えようと鑿（ノミ）一本に託した意気込みが伝わってくる墓石石柵です。

東北のミケランジェロ 小松寅吉

弘化元年（一八八四）年、山形村（現石川町）に生まれる。高遠藩から浅川町福貴作地区に移り石工をしていた小松利平に弟子入り。白河市東の鹿島神社の狛犬など数々の傑作を残し、東北のミケランジェロとたたえられている。大正四（一九一五）年に死去。

季節の

うた（第五十回）



小針 光（八千代市）

夏嵐机上の白紙飛び尽す

正岡子規

「解説」明治二十九年作。青空の広がる真夏の日中、窓を開け放してあった部屋に急に南寄りの強い風が吹き込んで、机の上の白紙をすべて飛ばしてしまつた。病床にある子規が外界とのつながりを感じた、力強く、またさわやかな句。（『三省堂名歌名句辞典』）

「補説」子規は、明治二十七年画家中村不折に出会い、美術の写生を文学に応用した。写生論の構築を通して、子規作品も変化を見せている。この句に見られるような、対象物の色と動きへの注目は、写生による俳句革新が順調に進んだ明治二十九年ならばこそのものである。この句ではまた、「飛び尽す」という表現によって、絵画の写生では難しい時間の経過を、俳句の写生で表現することにも成功している。（『名歌・名句大事典明

治書院」)

《作者正岡子規略歴》

明治三十年(三十才)一月十五日、子規派俳句雑誌『ホトトギス』松山で創刊号が出る。発行兼編集人柳原極堂(海南新聞編集者)、発行部数三〇〇部。三月、

佐藤三吉博士の腰部手術を受ける。歩行不自由の病床の身となり、看護婦を置く。同月より「俳人蕪村」を『日本新聞』に十月まで連載。六月畏友(いゆう)の哲学者米山保三郎二十九歳で死去。十二月二十四日、「子規庵」で二十人の人を集めて「蕪村忌」を開く。

明治三十一年一月、月給四十円(約五十万円)に昇給。二月十二日、「歌よみに与ふる書」を『日本新聞』に十回にわたり発表。猛烈な勢いで短歌革新にのり出した。同月松山で発行した『ホトトギス』を東京に移し発行。子規主宰者、編集は愛弟子高浜虚子。発行部数一五〇〇部。子規は最初の写生文として知られる「小園の記」を掲載。『ホトトギス』売切、五〇〇部増刷。なお『ホトトギス』は、一九九七年一月満百年となった。日本では最も古い文学雑誌である。

明治三十二年一月、「俳句新派の傾向」を、『ホトトギス』に発表。二月「子規庵」で根岸短歌を起こし、以後「蕪村句集輪講会」と併せて毎月開く。この年は『ホトトギス』に小品「飯待つ間」、「根

岸草蘆記事」、「熊手と提灯」など多くの写生文を発表。「明治の美文は写生以外ないとする。」文章革新に着手した。十二月中旬、病室の南側をガラス障子にして日光を浴びながら原稿を書く。

《余談『子規の画(え)』》
子規と漱石を親しい友人に結びつけたのは俳句だったとされる。漱石が松山、熊本時代に子規に添削を求めた句は、一七〇〇余句。漱石が五年の間、子規に句稿を送り続けたのは、「病床の子規を楽しませたかったという心配りが働いたと見るべきだろう。」との友情説がある。が、子規はその中の秀句を『日本新聞』の「文苑」に載せた。漱石はその新聞を切抜いて紙袋の中に貯えるのを楽しみにしていたという。現在、漱石俳句は風格の高さ、抒情の美しさから、子規を中心とする明治俳壇の中でも最も光る俳人の一人とされる。

明治三十三年、漱石は文部省より「英語研究」の為英国留学を命ぜられ、日本を離れる。

処で、子規の美術的才能は、幼少時画に熱中した事が知られていて、晩年は病床のつれづれに絵筆を執り、明治三十二年六月「東菊の画」を熊本の漱石に贈った。この画を大切に仕舞っていた漱石は、小説家となった晩年に「余は子規の描いた画をたった一枚持っている。画は一輪

ざしに挿した東菊が図柄できわめて簡単である。」書き出される小品の随筆を残した。

漱石は、亡友の形見を散逸せぬために、子規からの手紙二通、一通は留学先のロンドンへの最後の手紙を選び、その中間に画をはさんで三つひとまとめ、表具屋に表装させ、壁に懸け、ながめて見ている時に、高浜虚子がやってきて、「正岡の絵はうまいじゃありませんか。」と大変わめたという。

この表装の絵が『新潮日本文学アルバム正岡子規』に掲載されている。

絵は中央に「寄漱石」と前書を付され、東菊を描く。傍(かたわら)に「コレハシボミカケタ処と思ヒタマへ画ガマツイノハ病人ダカラト思ヒタマイ嘘ダト思ハバ肱ツイテカイテ見タマへ」と注釈。左の余白に歌を添えている。

あづま菊いけて置きけり
火の国に住みける
君の帰ってくるかね

「火の国」は熊本県。子規は「この夏に帰ってきてくれ」と言ったもの。しかし漱石の帰郷はなかった。

(参考文献『正岡子規・久保田正文著』他)
福島県公式イメージポスター

二〇二〇完成く浅川町選ばれるく

浅川町農政商工課
福島県が平成二十九年(二〇一七年)から作成している「福島県公式イメージポスター」が今年も完成し、九月二十七日に発表されました。

今年度は相馬市の「カゲスカ海岸」や県のオリジナル品種・「天のつぶ」会津若松市の「鶴ヶ城」などがデザインされ、「住んで」のポスターに浅川町の「城山から望む田園風景」が採用されました。

福島県の担当者によると、このポスターは福島県内の関係各所のほか、日本橋ふくしま館MIDETTE(ミデッテ)などでも掲示される予定です。お近くに足を運ばれた際はぜひご覧になっていただければ幸いです。



写真：福島県公式イメージポスター2020